

シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅲ〕

村 上 吉 男

ヴェーユの哲学とは何か(4)

そして〈運動する身体の反応〉は〈感覚〉や〈感情〉に対し、上記した〈思惟（精神）〉の場合と比べどうあるか。〈身体〉の〈感覚（ヴェーユではsensation, デカルトではsens）〉でない〈感覚〉や〈感情〉は〈魂〉の能力〈感じる〉によって〈魂（視床脳）〉に生み出された。かかる〈反応〉は、〈魂〉の〈感じる（望む）〉に〈遂行〉したり、〈魂でつくられた願望（感覚や感情）〉に〈付随〉したりするとされる。そこからかかる〈反応〉が〈思惟〉の場合と相違し、〈魂〉の〈望む〉と〈願望〉にかかわることを示しては、〈魂〉の〈身体〉への遠心的な〈関係〉があると予想されるし、また一方で〈脳〉全体をさす〈魂に対する身体の影響を検討してみよう〉では、〈身体〉は当然〈魂〉に求心的な〈関係〉を持たざるを得なくなる。

と同時に、ヴェーユや筆者にあって強調されるべきは、〈魂〉の〈感じる〉がそこで何も〈感覚〉や〈感情〉だけを各生じさせるのではなかった、つまりは〈魂〉の〈感じる〉をして〈魂〉に〈感受性〉をも生み出させていたということである。それに〈魂〉の〈感受性〉は、上記した〈魂〉の〈感覚〉や〈感情〉と同様に、〈魂でつくられた〉場合を有するほか、〈身体〉の〈感じる〉から生じる〈感覚（sensation）〉が〈魂〉に伝わると同じく、あの〈運動する身体の反応〉に、すなわち筆者にいう〈身体〉の〈感受性〉にかかわったうえでもたらされる場合もある。だから今は、〈魂でつくられた〉〈感受性〉や〈身体〉とのかかわりで生まれる〈魂〉の〈感受性〉のことよりか、〈運動する身体の反応〉自体について答える方が先きとなる。それは〈身体〉が〈運動する〉とは〈感じる〉ことに、〈運動する身体の反応〉とはこの〈感じる〉こととその能力が「反射」として〈身体〉で〈反応〉することにある。その能力は一般にいう〈感覚〉であり、彼女に独自に語られる〈感受性〉である。それゆえ〈身体〉の〈能動〉能力たる〈感じる〉はこれによって生み出される各〈受動〉能力の〈感覚〉や〈感受性〉に共通（有）して用いられることになる。

〈身体〉の〈感じる〉が指摘される例は、〈palper（触ってみる）〉⁽¹⁾である。五官（感）の一なる触覚はこの〈感じる（触ってみる）〉からもたらされる以外にあり得ない。そこで話題の中心をかの〈思惟（精神）〉のことに戻し、この視点から〈運動する身体の反応〉である〈感じる〉とその能力と比較すれば、〈思惟（精神）〉は〈思惟〉で〈触ってみる〉ことができないばかりか、前号引用文にみられる通り、たとえば触覚が何らかの人工物を〈触って〉確かめ得ても、〈思惟（精神）〉はこれを〈ピンセット〉と命名させるほかにならう。そのうえ〈思惟（精神）〉は〈身体〉の、ましてや〈魂（視床脳）〉の各〈感じる〉

とその各能力を〈精神（大脳皮質）〉で発生させることはない。〈身体〉の〈感じる〉一がその触覚（感覚）をもたらし、これを〈身体〉から〈精神（大脳皮質）〉と〈魂（視床脳）〉とを含む〈魂〉全体に伝えるにしろ、〈魂〉全体からみる触覚（感覚）は〈受動〉能力として〈精神〉に伝えられるのではなく、何より〈魂（視床脳）〉に伝達されなければならぬし、この触覚（感覚）がなおも〈思惟（精神）〉にかかわるとされるときにのみ、〈魂（視床脳）〉を經由し〈精神（大脳皮質）〉に受容される。〈脳〉全体をさして〈魂〉とみなすのは、〈精神（大脳皮質）〉と〈魂（視床脳）〉にはこうした関連があることによるからである。しかして〈身体〉の〈感じる〉はヴェーユにあって、その〈反応（受動）〉たる〈身体〉の〈感覚〉だけか、〈身体〉の〈感受性〉を生んだ。かつ彼女は、〈感覚〉は〈質〉をあらわす以外〈何ものでもない〉と断じて、もはや取り合わず、〈量〉と捉えられよう〈感受性〉を問題にしていたのである。

そこでこれから〈感受性〉についてみていく際、筆者はまずもって、〈感受性〉を生じさせよう、〈身体〉と〈魂（視床脳）〉の各〈感じる〉が「なぜ〈身体〉に〈関係〉するといえるか」という先きの疑問に答えておかねばなるまい。一解答は各〈感じる〉をして、〈魂（視床脳）〉を含ませていう〈身体〉に、しかもその生得的な〈運動〉にかかわらせることにある。だがそれだけでは真の答えにならない。そこには〈身体〉の生得的な〈運動〉で生じる各〈感じる〉に対し、当の〈身体〉や〈魂（視床脳）〉の各〈身体構造に妨害される〉とみなされた点が抜け落ちるからである。すでに触れたように、かの〈思惟する〉も上記の〈感じる〉と同じく、〈身体構造〉での〈妨害〉を、その部位を〈感じる〉と異ならしめる〈精神（大脳皮質）〉で受けたが、しかし〈感覚〉やこれに伴うであろう〈感情〉をもたらす、〈身体〉や〈魂（視床脳）〉の各〈感じる〉にはこうした〈妨害〉はみられなかった。だから〈妨害〉に出会った〈思惟する〉は〈思惟する〉で、確たる〈思惟〉を見出すべく、さらなる〈思惟する〉を課して、その都度の〈妨害〉を乗り越えねばならぬし、それ自体が〈思惟（知性）〉の役割であるという一方、後段で語る通り、〈妨害〉たる〈感受性〉ゆえの〈感情〉は一般にいう、〈感覚〉による〈感情〉とは異なるわけである。

しかしながら、〈思惟する〉際の〈妨害〉に対処すべく、〈思惟する〉が繰返し行使されて〈思惟〉を生み出さんとするのに比べると、〈感受性〉を生じさせる〈感じる〉も〈妨害〉を被るにせよ、〈思惟する〉場合と相違すると捉えておかねばならない。なぜなら筆者には、〈身体〉や〈魂（視床脳）〉での〈感じる〉ときに会おう各〈妨害〉こそ〈感受性〉になると、要は各〈妨害〉で〈つくられた〉能力が〈感受性〉であろうと読み取られるからである。するとこの〈感じる〉はその〈妨害〉たる〈感受性〉を〈脳〉全体をさす〈魂〉に引き受けさせるほかなくなってくる。むしろ〈思惟する〉や〈感じる〉ときのいずれの〈妨害〉も〈人体（わたし）〉にとっては、生得的であり、〈必然性〉であるはいうまでもない。そのうえヴェーユは、〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉によって〈脳〉全体をさす〈魂〉を〈破壊〉させられた〈妨害〉すなわち〈不幸〉なる〈必然性〉に襲われることになる。筆者は〈必然性〉に与さす〈思惟の逃亡〉などを〈妨害〉以外の〈妨害（不幸）〉と記すと同時に、〈わたしたち〉人間はなかでもデカルトの登場以来、この生得的な、〈妨害〉と〈妨害〉以外の〈妨害（不幸）〉を忘却か拒絶かしてきたとみることができる。

ヴェーユは『デカルトにおける科学と知覚』と題した学士論文でこそ〈不幸〉のことを取り上げ論じはしなかったが、しかしそこに〈必然性〉の語を見出せる⁽²⁾ことでは、〈不幸〉

は語られていたと判断される。さすれば彼女はなぜ〈不幸〉を質しはしなかったのか。先の指摘の通り、デカルトは〈不幸〉を一切不問に付していたのだから、彼の思想（哲学）を批評する学士論文にあって、彼女は彼が提起しない問題〈不幸〉を述べるわけにゆくまい。ただ彼女が彼を論じるなかに彼女自らの思想を盛り込んだがゆえに、批評が可能になるは確かとみると、この〈不幸〉に関しこれを予感させ得るほどの語も一見されてよいと知り得る。それこそ〈思惟する〉や〈感じる〉における各〈妨害〉（の語）である。この各〈妨害〉さえ今日〈わたしたち〉に彼女の術語として理解される〈不幸〉に、また筆者にいう「〈妨害〉以外の〈妨害〉」に劣らず、〈わたしたち〉人間にとって〈不幸〉なのであり、〈必然性〉以外の何ものでもないのである。

デカルトが〈不幸〉を問題にしなかったことで、学士論文に〈不幸〉の語を書き入れたり、その知見を述べたりし得なかったにもかかわらず、ヴェーユが〈不幸〉に等しいと筆者に察知される〈妨害〉の語を潜ませていたことは、このとき〈不幸〉の語で明確に示さずとも、〈不幸〉が〈わたしたち〉に関与させられずにいないことに、彼女は気づかないはずがなかろう謂を有する。気づいていたからこそ、彼女が〈わたしたち〉の生得的な〈必然性〉たる〈妨害〉をして、〈わたしたち〉の諸能力〈思惟する〉とその〈思惟〉や、これも彼が言及できなかった〈感じる〉とその〈感受性〉に生じせしめると説くことができた、したがってこうした〈妨害〉が究明されないばかりか、「日常的用法」ですら、〈魂の破壊〉を惹起させる〈妨害（不幸）〉を講じない、デカルト思想の〈難点（欠点）〉⁽³⁾になると主張（批評）することができたのである（彼のいう〈真理の探求〉は〈âme（魂）〉でなしに、〈esprit（精神）〉を中心に展開されるにしろ、その〈精神〉の〈破壊〉という思想は皆無である）。また彼のいう、上記した二用法での各〈感じる〉とその各〈感覚〉も〈妨害される〉ことがないのみか、彼が〈感覚〉を〈信用しない〉と語るにあって、それでもこのことは視覚の〈感じる（見る）〉に例を取っていえば⁽⁴⁾、〈感覚〉が見る場所でそれぞれ異なるからして、〈信用〉されないだけであって、視覚の〈感じる〉とその〈感覚〉が〈妨害される〉ことも何らかかわらないと断じねばならない（〈真理の探求〉の用法での〈感じる〉（もしや〈想像する（imaginer）〉も）は〈能動〉として一括された〈思惟する〉諸能力の一とみられても、働きかけることをしないと捉え得るがゆえに、〈身体〉の〈感覚（sens）〉はむろんのこと、〈esprit（精神）〉の〈感覚（sentimentましてや passion）〉さえ生み出されはしない）。そしてこれで、デカルト思想（哲学）には〈妨害（不幸）〉の思想のないことが証明されたことになる。

筆者はここでもう一度、学士論文から工場体験前までの、ヴェーユの諸作品に述べられたなかでの、たとえば〈思惟（精神）〉と行動（身体）との関係について取り出し、それぞれにかかわるとされた、生得的な〈妨害〉のことをまとめおく。〈妨害〉を被るは〈精神〉の〈知性（理性）〉による〈思惟する〉と、〈身体〉の〈感受性〉になる〈感じる〉との各能力であった。〈思惟〉は、〈脳〉全体をさす〈魂〉すなわち〈わたし（人体）〉の一部分（層）をあらわす〈精神（大脳皮質）〉が〈思惟する〉とき、〈精神〉での〈妨害〉によりその「大脳皮質」の外に生まれた。〈感受性〉の方は、かかる〈わたし（人体）〉の他部分（層）である〈魂（視床脳）〉と、この〈脳（身体）〉以外の〈身体〉とが各〈感じる〉とき、〈魂〉や〈身体〉での各〈妨害〉により各〈身体〉に生み出されていた。そこで〈わたし（人体）〉が各〈妨害〉に対応するに、〈思惟する〉では〈思惟する〉をして、世界（の対象）に一

回かぎりの〈能動〉で解決を図らせないために、次々と〈運動〉せしめ、論理性を有した完璧な〈思惟〉を獲得できるまで、この〈運動（能動）〉を続ける以外にないと、また〈魂（視床脳）〉や〈身体〉で各働きかける〈感じる〉と両〈身体〉に生じる各〈感受性〉では、〈わたし（人体）〉という全体をさす〈魂〉は〈感じる〉とその〈感受性〉にそのまま従うほかなくなると指摘した。

さすればここに〈思惟（する）〉と〈感じる（その感受性）〉との各〈妨害〉の相違がみえてこよう。察するに、〈思惟する〉際の〈妨害〉とは、〈わたし（人体）〉の一部分（層）たる〈精神（大脳皮質）〉がそれ自身で世界（の対象）に反発することを、あるいは〈思惟する〉その〈思惟〉を瞬時にも〈精神（大脳皮質）〉の外に、要は〈脳〉全体をさす〈魂〉の外に放出させることを示すごとくに理解される。だが〈妨害〉が〈精神（大脳皮質）〉自体やその外に帰すかのいずれにみられようが、しかし〈妨害〉なくば、この〈精神〉さえ、もしかしてデカルトにいう〈真理の探求〉の〈精神〉と同じように、〈わたし（人体）〉たる全体をあらわす〈魂（脳）〉の外に配置させられるにちがいない。〈真理の探求〉の〈精神〉すなわち〈わたし〉が〈知性（理性）〉による〈思惟する〉ことにあって、〈妨害〉を受けないとされては、〈わたし〉はヴェーユにいう〈人体〉である必要がない。〈人体〉でなければ、彼にとって〈わたし〉とは何かが問題となろう。〈人体〉であるとみなされるがゆえに、彼女のいう〈精神〉は〈脳〉全体をさす〈魂〉にその一部分（層）として組み入れられていなければならなかった。また一方で〈妨害〉をとともに被る〈思惟（する）〉や〈感じる（その感受性）〉が〈脳〉全体をさす〈魂〉に織り込まれるといえるからこそ、この〈魂〉が彼女に不可欠になった。だが彼は〈人体〉を〈精神〉用と〈身体〉用に区別した各〈認識論〉を、換言すると〈esprit（精神）〉と〈âme（魂）〉各用の〈認識論〉を用意せざるを得なくなった。これやあれやの証左とされるは彼が〈妨害〉のことを、さらにいうと〈不幸〉のことを見逃していたことにある。彼女において、〈思惟〉を〈魂（脳）〉の外に捉えさせんとしたことは筆者に、〈思惟（する）〉が〈妨害〉に因果するからだとみえると同時に、〈思惟〉をもたらず〈思惟する〉が複数の世界（の対象）を一どきに〈思惟する〉ことをせぬためか、この〈運動（静の行動または能動）〉がいわば線〈運動〉でなしに、その都度論理的順次に従わされた点〈運動〉にしかなり得ないことによると答えられる。

筆者の造語たる点〈運動〉と線〈運動〉において、〈思惟（する）〉を点〈運動〉に含ませるならば、〈感じる（その感覚や感情）〉と〈感じる（その感受性）〉は線〈運動〉にかかわる諸能力になるとみることができる。ただし上記諸能力のうち、〈思惟（する）〉と〈感じる（その感受性）〉はヴェーユにとって、各〈身体構造に妨害される〉諸能力であったに対し、筆者は〈感じる（その感覚）〉をデカルトに代えて触れたごとく、彼女でもそこに〈その感情〉を加えて、各〈身体構造〉の〈妨害〉を受けない諸能力になるとみなしおく。つまり〈感じる（その感覚や感情）〉は〈身体構造〉の機能のままにその〈身体〉や彼女にいう〈魂〉（筆者にいう視床脳）に映し出されるということである。さらに以上を踏まえていい得ることは、点〈運動〉と線〈運動〉をそれぞれ、例の〈脳〉の各部分（層）をあらわす〈大脳皮質（精神）〉と〈視床脳（魂）〉で働きかける〈能動〉として捉えることにある。こうした〈脳〉を代表する二つの部分（層）の区分けには、各〈妨害〉の対応することが含意される。繰返しいうと、〈精神〉の〈思惟する〉と〈魂〉の〈感じる（そ

の感受性))は〈妨害〉にかかわったし、〈魂〉の〈感じる(その感覚や感情)〉はしかし、〈妨害〉がなかったことになる。しかして〈思惟(する)〉はもはや知る通り、瞬間をさす点〈運動〉だからして、時間経過に、ならびに複数の〈思惟〉内容に関知しない、要は後者をして、後述するところの〈量〉の問題に関連させないことを、また〈感じる(その感覚や感情)〉が時間的推移を要する線〈運動〉によるとしても、それらの能力はこれもすでに一見したように、〈量〉ではなく、〈質〉を語るにすぎないことが確認される。だから同じ線〈運動〉に導かれた〈感じる(その感受性)〉だけが同じ〈魂(視床脳)〉内で〈量〉にかかわることになり、〈感じる〉〈能動〉と〈その感受性〉〈受動〉を可能にさせるといえるが、ここでは左記にとどめおく。それでも上記した能力はみな、〈わたし(人体)たち〉が生得的な〈必然性〉を有する証しとなる諸能力であることに間違いないといえるほか、筆者には彼女が、かかる諸能力さえ〈必然性〉という、いわば世界(宇宙)の法(または命)によって、すべてがつくられているとする一であることを〈わたし(人体)たち〉に知らしめるように察知される。

とまれ、以上を見据えるならば、これから〈感じる(その感受性)〉の〈妨害〉と〈量〉について言及しようとするにあつては、同じ〈魂(視床脳)〉内でみられる諸能力の方は、要は〈妨害〉や〈量〉にも関与しない、この〈感じる(その感覚や感情)〉の方はすでに論外にみなされ得る。とはいえ学士論文にて、ヴェーユが〈新しいデカルト〉(第一部)⁽⁵⁾と表現したうえで、その用法を、つまり筆者に「もう一つの真理の探求」と命名せしめた用法を展開した(第二部)とき、そこにこれも筆者にいう「日常的用法」でデカルトの用いた〈感じる(その感覚や感情)〉を織り込ませ、これらの能力の各「認識の起こり」を語るがごとくにみえるからして、筆者には彼女が「日常的用法」での、各「認識の起こり」をいかに捉えたか、簡単にまとめてでも確かめおくことが課せられる。彼は〈脳〉の解剖に立ち会い、かつその実験を試みたとされるのだから、〈感じる(その感覚や感情)〉(の起こり)は、彼女が示唆するように、〈わたし(人体)たち〉の有する、生得的な〈必然性〉たる諸能力(の起こり)と同じであるとみてかまわぬわけである。

〈魂(視床脳)〉が〈感覚〉や〈感情〉をもたらず〈感じる〉をすべて指揮し、そのうえで〈魂〉の〈sentir〉が〈身体〉に伝わり、〈身体〉の〈ressentir〉を起動させるか定かにならねど、もしそう受け取っても、たとえば人が木を見るは、〈魂〉の指揮(命令)よりか、実際〈身体〉の〈感じる〉働きかけがあつて可能になる。そこに立つと、まず〈身体〉の〈感じる(ressentir)〉から、ヴェーユのいう〈sensation〉やデカルトのいう〈sens〉なる〈感覚〉が〈身体〉に生じるし、〈感覚〉が〈魂(視床脳)〉に伝達されるならば、〈魂〉で〈身体〉の〈感覚〉のままに反射させられるかするほか、今度は〈魂〉の〈感じる(sentir)〉が働きかけ、彼女のいう〈sensation〉や彼のいう〈sentiment〉なる〈感覚〉が〈魂〉に生み出されたりするであろう。また時間を経過させて、〈魂〉に受容された〈身体〉の〈感覚〉や〈魂〉で生じたその〈感覚〉に、〈魂〉の〈感じる〉が「再び」働きかけ(ressentir)て、〈魂〉の〈感覚〉を、もしくはこの〈感覚〉に起因させられた〈感情(affection)〉をもたらずにちがいのなかろう。そして彼女の場合、〈魂〉の〈感覚〉や〈感情〉が〈魂〉から〈精神〉に伝わり、そこでこの〈精神(大脳皮質)〉の〈思惟(する)〉が各働きかけた際でも、〈感覚〉や〈感情〉を伴った各〈思惟〉は〈精神〉の外に見出されることになろう。〈思惟(する)〉にはだから、この〈感覚〉や〈感情〉のそれぞれにかかわったり、かかわ

らない各〈思惟〉が生じることになる。だがその〈思惟〉が〈何ものでもない〉〈感覚〉や、こうした〈感覚〉に発する〈感情〉とに組み合わせられるのでは、不確かな〈思惟〉にしかなり得ないであろう。確たる〈思惟〉にすべく、彼は〈真理の探求〉を提唱し、そこから〈感覚〉や〈感情〉を排除したともいえる。

さて上記の〈感じる（その感覚や感情）〉に比べ、もう一方の〈感じる（その感受性）〉の「認識の起こり」たるはどうか。同じ〈魂（視床脳）〉内で生じる〈感じる（その感受性）〉は当然、〈感じる（その感覚や感情）〉の「認識の起こり」とおよそ同じ経過をたどるといわねばなるまい。なぜなら学士論文第二部に突如記される〈感受性〉の語がすでに触れていた通り⁶⁾、デカルトのいう〈身体〉の〈感覚（sens）〉や〈魂〉の〈感覚（sentiment）〉の各語に入れ換えられることで、各〈感覚〉（ならびに各〈感覚〉から生まれ出る感情）の「認識の起こり」と同じになるからである。ヴェーユのいう〈la sensibilité passive（受動的感受性）〉⁷⁾の例に対し、筆者はだから、彼のいう〈les perceptions que l'âme reçoit（魂が受け取る知覚）〉⁸⁾とする語句を当てはめ得る。〈知覚〉の一は〈感覚〉であり、〈知覚（感覚）〉はこれに〈par l'entremise des nerfs（神経を介して）〉⁹⁾と続くので、〈身体〉の〈sens〉をさすと解する。すると彼女のいう〈感受性〉にも〈身体〉と〈魂〉の各〈感受性〉があってよいことになる。ただ〈感じる（その感覚や感情）〉と同じ「認識の起こり」にみられるとしたことでは、以下のことが注意されるべきである。一に、〈感じる（その感受性）〉に〈感覚〉や〈感情〉を生じさせる〈感じる〉は、逆に〈感じる（その感覚や感情）〉に〈感受性〉をもたらし〈感じる〉は関係してこないといえるが、一に、〈魂（視床脳）〉の〈感受性〉が〈感覚〉や〈感情〉の場合と同様に、〈精神（大脳皮質）〉に伝わり、その〈思惟（する）〉との関係はどうかを見定める必要があるということである。

そこでは〈感覚〉や〈感情〉で指摘したと同じく、〈思惟（する）〉が〈感受性〉とかかわったり、かかわらない各〈思惟〉を、〈精神（大脳皮質）〉（またはこれと他の〈脳〉を含んだ全体をさしている〈魂〉）の外に生み出すやも知れぬ。そのとき問われるは前者（かかわる）の方であり、筆者は〈思惟（する）〉と〈感受性〉が「かかわる」に対し、〈量〉のことを抜きに語れなくなる。まず〈量〉の程度がここでも例の「閾値」を超えるほどに「かかわる」場合、〈魂（視床脳）〉の〈感受性〉は〈精神（大脳皮質）〉に伝わり、この〈思惟（する）〉が〈感受性〉と〈混合〉¹⁰⁾（組み合わせ）され得ると推し量るにしろ、筆者には、〈感覚〉や〈感情〉と各〈混合〉して成った、不確かな〈思惟〉に同じとみなされるのかが、はたまた〈精神〉にあっては〈能動〉だけの、点〈運動〉だからして、〈量〉といえない〈思惟（する）〉と〈感受性〉は〈精神〉でどう「閾値」（量）にかかわり得るかが疑問なのである。そしてこの疑問は、ヴェーユのいう〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉のことから、「かかわる」を、〈思惟（する）〉と〈感受性〉を〈混合〉させるかかわりにあるとみるのではなく、〈魂〉の〈感受性〉の〈精神〉への伝達をして〈感受性〉を〈思惟（する）〉際の「閾値」に勝る、大なる〈量〉として「かかわ」らせると答えておかなければならない。要するに〈感受性〉の伝達によって、すなわち〈運動というものは量的である〉¹¹⁾ことによって、その〈量〉が〈思惟（する）〉を〈逃亡〉や〈空無（真空）〉にさせたのである。

換言すると、〈身体〉の〈感じる（ressentir）〉〈能動〉すなわち〈運動〉（あるいは「動の行動」や〈労働〉）において、そこから不断よりか、非常に急激な血液の流れや大なる〈量〉

の「神経伝達物質」による神経の高ぶりを伴い生じる、〈身体〉の〈感受性（受動）〉がさらに〈魂（視床脳）〉に伝達（運動）し、それ自身〈運動する身体の反応〉として〈魂〉で反射するか、また〈魂〉の〈感じる（sentirやressentir）〉が〈身体〉の〈感受性〉に働きかける〈能動（運動）〉にとっては、〈魂〉の〈感受性〉（受動）を生み出すかする〈運動〉にあるはむろんのこと、そのうえ〈量的〉持続的なこの線〈運動〉でもって〈精神（大脳皮質）〉にさえ伝達（運動）すべく影響を及ぼさずにおれないとき、〈身体〉や〈魂〉の各〈感受性〉は〈精神〉の〈思惟（する）〉機能をいわば停止させよう〈妨害〉にならざるを得ない。そこに追い込むやいなや、〈精神〉すらもはや〈感受性〉だけによって満たされるほかなくなるばかりか、〈精神〉の〈思惟（する）〉機能が〈破壊〉され、〈魂（視床脳）〉の〈感受性〉に取って代わられたからして、〈脳〉全体をさす〈魂〉で〈わたし（人体）〉を表現することが可能になり、この〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉の現実を契機にして、ヴェーユに〈魂の破壊〉といわせたのである。

だがヴェーユの主張する、こうした〈感受性〉が当時（も今も）一般に流布された思想でないようにみえることを踏まえれば、〈魂の破壊〉は繰返すが、〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉によって生じるとしかいいようがなくなるは当然であろう。しかし筆者にすれば、これも繰返しになるが、〈魂の破壊〉の〈破壊〉は〈感受性〉が原因し、〈破壊〉される〈魂〉は「視床脳」の〈魂〉ではなく、この〈魂〉と〈精神（大脳皮質）〉とを取り込んでいう〈魂〉でなければならぬであろう。このことが彼女のいう〈精神（esprit）〉と〈魂（âme）〉を使い分けしたゆえんとなるのであり、かつ〈感受性〉を中核にし、仲立ちにした、この使い分けからしか、筆者に〈思惟（する）〉〈精神の破壊〉とされてよいことを、彼女に〈魂の破壊〉と語らせる以外になかったと断じられる。だから彼女にとって、一に〈わたし（人体）〉の有するあらゆる能力のなかで、誰も目に止めない、〈魂（視床脳）〉よりも、まずは〈身体〉の〈感受性〉が主たる能力として優先され、これなくば〈わたし（人体）〉なる〈脳〉全体をも彼女に語らせはさせないからして、その全体を名付ける〈魂〉（の語）が入り用になっていたとみられるわけである（彼女がなぜ〈脳〉全体をさす〈魂〉を持ち出したかの他の理由は後述に譲る）。

筆者はまた「〈感じる（その感受性）〉は〈魂（視床脳）〉と〈身体〉での各〈妨害〉により、各〈身体〉に生み出されていた」と記しおいたが、ここから、まず「各〈身体〉」としたは〈わたし（人体）〉を含意させる表記である、つまり〈わたし〉とは、上記中の〈魂〉や〈精神〉が「人」をあらわし、同時に「視床脳」や「大脳皮質」という「体（身体）」であることを、そしてその「各〈身体〉に生み出されていた」〈感受性〉は〈感じる〉〈能動〉をして、つまり〈身体〉の〈運動〉（「動の行動」や〈労働〉）をして実現せしめられることを読み取り得るほか、さらに「各〈身体〉」での「各〈妨害〉」はとどのつまり何を語るかを探らねばなるまい。その答えとは以下の通りである。すなわち、〈感じる〉〈能動（運動）〉と〈同一のことがらである〉〈感受性〉〈受動（運動）〉は、少なくとも〈感受性〉を打ち出せなかったデカルトとはこの点で相違させずにいないが、しかしヴェーユにあって、〈魂（視床脳）〉と〈身体〉それぞれの生得的な〈必然性〉たる〈運動〉によっているのだし、しかもこの〈運動〉自体が各〈身体構造〉に対し、〈妨害〉を惹起させたり、たんに「閾値」を超えるだけの〈量〉ではない〈量〉を生じさせたりするとすると、〈運動〉である〈感じる（その感受性）〉はすでに〈妨害〉や〈量〉に置き換えられてかまわぬ能

力にしかかなり得ないといわせることにあるのだ。〈感じる（その感受性）〉にとって〈身体構造に妨害される〉は〈量〉ゆえであり、そこから〈量〉は〈妨害〉であるともいえる。したがって〈妨害〉や〈量〉である〈感じる（その感受性）〉は、〈妨害〉がないからして、およそ〈質〉しかあらわさないような〈感じる（その感覚や感情）〉と区別されて捉えられねばならぬ一方、これ（後者の諸能力）と、たとえば時間などの広がりや要することでは同じ線〈運動〉にみられようとも、〈妨害〉すなわち〈量〉にかかわる線〈運動〉として相違させておく必要がある。要は〈身体〉や〈魂〉の各〈感じる（その感受性）〉という線〈運動〉に〈妨害〉をみることは、かかる線〈運動〉に〈量〉が生じていることであり、逆に、かかる線〈運動〉に〈量〉をみることは、そこに〈妨害〉が生じているといえることである。

だがそうした〈感じる（その感受性）〉で述べたことは、〈思惟（する）〉には当てはまらない。そうなのか。筆者でさえ、〈思惟（する）〉に〈妨害〉が付きまとったと記しおいたではないか。ところが〈思惟（する）〉際の〈妨害〉はすでに触れた通り、〈精神（大脳皮質）〉内での〈妨害〉でしかなく、〈身体〉や〈魂（視床脳）〉での、各線〈運動〉である〈感じる（その感受性）〉際の、〈量〉を伴わずにいない〈妨害〉とは異なるといわざるを得なくなる。この相違ゆえに、筆者は〈思惟（する）〉が〈量〉と無関係になることで、点〈運動〉をするとみなし得たし、〈妨害〉をばその点〈運動〉にて生じさせると指摘した。とはいえ点〈運動〉での〈妨害〉は何に原因するか。ヴェーユいわく、それは、〈精神〉の〈思惟（する）〉機能が〈思惟する〉〈能動〉以外にないとされることによるのであって、たとえば、筆者が〈精神〉を〈身体〉とでなしに、〈魂〉と比較させてみても、〈精神〉には、〈魂〉の〈感じる〉〈能動〉だけか、その〈感受性〉を生み出す機能が兼ね備えられていないことにある。

しかも〈わたし（人体）〉の生得的な〈必然性〉の能力に変わりのない〈思惟する〉は、それが働きかけるやいなや、必ず〈わたし（人体）〉に〈妨害〉となって跳ね返ってくる。なぜならこの〈妨害〉は、一度かぎりの〈思惟する〉〈能動〉では、世界（の対象）の現実（真実）を〈わたし（人体）〉に知らしめないことを、別言すると世界（の対象）に向け、〈思惟する〉〈能動〉を何度も繰返してこそ、〈精神〉には現実（真実）が何かが確認され得ることをさすからである（確認できたとして、〈思惟〉は実際〈精神（大脳皮質）〉の外で知らしめられた）。この場合、〈精神〉は〈わたし（人体）〉の一部分であり、〈思惟する〉はヴェーユにいう〈わたしが欲する（意志する）〉に代表される〈精神〉の能力であることで、筆者はここに〈わたし（人体）〉と〈精神〉とを関係さすべく持ち出すことができた。だがそこで確かなることは、〈わたし（人体）〉が〈精神（大脳皮質）〉で、いくら「静の行動」たる〈思惟する〉を試みても、〈思惟する〉はこの「静の行動」の当初より「大脳皮質」（身体）以外の〈身体〉に〈運動〉（動の行動）を伴わすことのない能力でしかなかった。彼女が〈妨害とはつねにわたしが欲するところへ、ときおりわたしを連れていく〉¹⁴と記したは上記を例にしたことであり、これも〈思惟する〉際の〈妨害〉の一に加えられることになる。〈思惟する〉にとって、この〈欲する（vouloir）〉と同時に、〈身体〉が動くことにはならない。彼女はここにおいても、〈思惟（する）〉すなわち〈知性（理性）〉に信をおけなかった。これに比べ、〈感じる（その感受性）〉の方は〈わたし（人体）〉の、つまり〈魂（視床脳）〉のばかりか、〈身体〉の〈運動〉でもあるからして、まさに各〈身

体)と直接関係する。それに〈魂の破壊〉に導くとされた、例の〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無(真空)〉にあって、この原因もまた、〈受動〉の〈感受性〉をしてその〈量〉でもって〈思惟する〉を〈妨害〉せしめるにあったと、要は〈思惟する〉はその〈量〉なくばかのごとく〈妨害〉されなかったと読み得るのだから、〈感受性〉はすでに〈量〉や〈妨害〉そのものを意味させる能力であると結語することができる。

〈魂(âme)〉と〈身体〉との関係について

だからか、〈身体〉に、かつ〈魂(視床脳)〉に相次いで生じ、〈精神(大脳皮質)〉にさえ影響を及ぼす〈感受性〉によって、〈精神〉の〈思惟(する)〉が〈逃亡〉し〈空無(真空)〉にさせられることは、〈脳〉全体をさす〈魂〉すなわち〈わたし(人体)〉の完璧な〈破壊〉へと導かざるを得なくする。これこそヴェーユのいう〈魂の破壊〉であり、筆者が「完璧な〈魂の破壊〉」と記した謂である。さらにいうと〈魂の破壊〉は〈わたし(人体)〉にとって、これも生得的な〈必然性〉である〈妨害〉に充当しては、彼女にいう、術語の〈不幸〉となる。しかしここでは、この〈不幸〉が彼女という〈わたし(人体)〉を襲うは、すでにマルクスと比較させてみた際、一問題として取り上げた、彼女の世界(社会)への接触すなわち工場体験によってであると、要は個人の生得的な〈必然性〉である〈妨害〉、いわば〈自然〉による〈妨害〉もさることながら、〈わたしたち〉がかたちづくってきた世界(社会主義共産主義社会)もまた、資本主義社会に劣らず、〈不幸〉から逃れられない、その生得的な〈必然性〉でしかないように彼女には受け取られたと述べるにとどめおく。

なぜなら筆者には、前段に記した〈魂の破壊〉と表現される〈魂〉がヴェーユに「なぜ持ち出されたかの他の理由」に答える方が先きであって、〈わたしたち〉のあるべき社会の姿も、彼女のこうした思想の解明なしに語れないと察知されるからである。「他の理由」とは、彼女が工場体験を契機にして、〈わたし(人体)〉すなわち〈脳〉を〈精神(思惟)〉と身体(行動)との関係)としてだけでなく、そこに〈魂(感受性)と身体(行動)との関係)を含めてみなければならなくなったことにある。いや前者(の関係)よりか、彼女に現に、〈身体〉や〈魂(視床脳)〉の各〈感受性〉の〈運動(行動)〉(線〈運動〉)が「大脳皮質」たる〈精神(思惟)〉にまで影響し、しかもその〈思惟する〉機能を失わせては、この〈感受性〉に関する〈魂と身体との関係)が自らの思想形成や生き方のうえで、明らかに深められていったと読む必要がある。〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無(真空)〉さえ、〈わたし(人体)〉すなわち〈脳〉の全体をあらわす〈魂〉に与したとされるゆえの、〈魂の破壊〉と捉えられるは、工場体験後の作品⁹³によるのであり、〈思惟の逃亡〉などは確かに〈精神〉にかかわるにしろ、これをもって彼女に、〈わたし(人体)〉の一部たる〈精神の破壊〉とは語らせていないところにこそ、〈脳〉全体をさす〈魂〉(の語)の、かつ〈魂の破壊〉という語句の持ち出された理由が求められなくてはならないわけである。

それに、ヴェーユの工場体験の試みは筆者にとって、〈わたしたち〉の〈思惟する〉や〈感じる〉各能力が生得的な〈妨害〉に起因して成るか否かを確かめる実験に等しいと推察されども、さらに彼女に予想だにされなかったといえる〈魂の破壊〉を生じさせては、〈魂の破壊〉が上記した生得的な「〈妨害〉以外の〈妨害〉」を、要は彼女のいう〈不幸〉の一を打ち出す動機になり得たと見て取らねば、〈わたし(人体)〉すなわち〈脳〉の全体を〈魂〉

と見立てることは不可能なのである。工場体験（1934年12月4日～1935年7月31日）はだから、彼女の死（1943年）まで10年を切る日々をして、もろもろの〈不幸〉を彼女に究明せしめた出発点に位置づけられる。

Si j'ai de la tristesse, cela vient d'abord de la tristesse permanente que le sort a imprimée pour toujours dans ma sensibilité à laquelle les joies les plus grandes, les plus pures, peuvent seulement se superposer, et cela au prix d'un effort de l'attention; puis de mes misérables et continuels péchés; puis de tous les malheurs de cette époque et de tous ceux de tous les siècles passés.⁹⁴

わたしが悲しんでいるとすれば、まずわたしの悲しみは天命がわたしの感受性に永遠に刻み込んだ、不変の悲しみからくる。もっとも大きくて純粋な歓喜すらわたしの感受性に重なり得るし、しかも悲しみや歓喜は注意力の努力を払って生じる。次にわたしの悲しみはわたしの惨めな、たえず繰返される過ちからくる。そしてわたしの悲しみはこの時代のすべての不幸と過去のすべての世紀のすべての不幸からくる。

筆者にすれば、ヴェーユが前記した語句のうち、「生得的な〈妨害〉」は〈わたしたち〉が生まれながらにして〈不幸〉であると、また「彼女のいう不幸の一」は引用文中の〈この時代のすべての不幸〉に含まれると語ることに見えからして、彼女が工場体験以降、疲労の増す只中でなおも心血（「静の行動」）を注いで、上記の〈不幸〉や〈過去のすべての世紀のすべての不幸〉をはじめとする、「もろもろの〈不幸〉」を解剖せんとし、その本までを見極めようとしたは事実なのである。周知のように、彼女は工場体験前の学生時代や教師時代から、自らに掲げる〈活動（思惟と行動）〉でもって、資本主義フランスの、全体主義ドイツの、社会主義共産主義ソヴェットの各社会による、〈この時代のすべての不幸〉を、わけても各社会の大半を占める人間（労働者）たちの〈不幸〉を明かそうとしていた。だからこうした〈不幸〉を現実に証したは、〈不幸〉に対する、彼女の痛切な叫びが〈行動（「動の行動」）〉を伴わせるはむろんのこと、この〈行動（「動の行動」）〉より生じよう、上記引用文の〈悲しみ〉や〈歓喜〉のごとき語を宛がい得る〈思惟（「静の行動」）〉をして、諸雑誌などへの無数の論文の投稿を実現せしめて表現されたことに見出せるわけである。

しかし筆者が察するに、工場体験からのヴェーユは、自らが工場体験前まで支えとしていた、〈活動〉という〈思惟と行動〉のあるべき〈関係〉を、たとえばこの両語が等しく用いられねばならぬとされる〈関係〉を理想や同位に捉え得なくなったように受け止められる。彼女は〈思惟と行動との関係〉を〈思惟〉よりか、むしろ〈行動（動の行動）〉すなわち〈運動〉する身体（感受性）なしに語れなくなった、換言すると身体（感受性）の方を〈思惟（静の行動）〉すなわち精神よりも優先させずにおれなくなった。彼女が工場体験前にあって、前段に記す両社会の各労働者たちの〈不幸〉を告発したは確かである。その告発はしかし、世間に名が知られはじめたサルトルに比べ、彼女のごとき無名の身では誰にも聞き入れてもらえないどころか、彼女が各社会の外側にいて各社会を批評するにすぎないことを自らに教えさせた。だからか他人が聞き耳を持つか否かは別にしろ、彼女

は自国の労働者社会（集団）の内側に加わり得る〈行動（動の行動）〉を起こしたうえで、労働者たちの〈不幸〉の現実を〈思惟（静の行動）〉に託し確かめようとした。それだけでなく、工場体験では、〈わたし（人体）〉の有する諸能力をして生得的な〈妨害（不幸）〉に陥らせるとかの学士論文に記されたことがおのずと明かされるであろうし、彼女個人にはもとより、集団社会のなかにあっても、〈思惟〉と〈行動（身体の感受性）〉という諸能力を基調に打ち立てられていた「認識の起こり（認識論）」が成り立ち得るかをみることでできたにちがいない。

以上から、筆者は一に、〈思惟と行動との関係〉はまぎれもなく〈精神と身体との関係〉になるといわねばならない。だが工場体験は、〈運動〉する身体に生じる〈感受性〉が〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉を誘発させたからして、〈精神（思惟）と身体（行動）との関係〉に関しては、その点での因果関係があることを現出させよう。しかしそれは〈思惟〉から〈行動（身体の感受性）〉への〈関係〉にないとするれば、そこに相互的な関係を見出せるはずがなかろう。それどころか、〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉からは、当然〈思惟（精神）〉は身体（感受性）に関係しなくなるし、何せ〈精神（大脳皮質）〉は〈感受性〉を生み出す、〈脳〉の部位ではないのだから。また彼女によれば、〈精神〉は〈思惟する〉〈能動〉機能を試みるだけでその〈受動〉に関知せぬために、〈精神〉という〈脳（身体）〉に完全に関係することがないとされる。だから上記から、〈精神〉に影響を与える〈感受性〉の〈脳〉のありかを〈精神〉とは別の部位に見据えおく必要が彼女に生じる。その部位は筆者のいう「視床脳」であり、彼女はこれを〈魂〉とみなしたし、さらに〈精神（大脳皮質）〉と〈魂（視床脳）〉で代表される〈脳〉全体をも〈魂〉と名付け、この〈魂〉をもって〈わたし（人体）〉といい得た。かつ〈わたし〉が〈人体〉と理解されるかぎり、〈わたし〉には〈脳〉全体をさす〈魂〉以外の身体も含まれるとみて当然である。

すると筆者は、〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無（真空）〉を現出させる、つまり〈思惟する〉を機能せしめない〈精神〉が、〈わたし（人体）〉なる、一方の〈身体との関係〉に対して〈妨害（不幸）〉になると捉えずにおれなくなる。それでもヴェーユにとっては、〈思惟する〉能力の部位を〈精神〉と呼ばずに、また〈思惟と行動との関係〉を打ち立てなくば、〈精神〉の語が持ち出される必要はなかろう。だが彼女が〈思惟する〉を取り上げ、〈精神〉ではこの〈能動〉機能しかないと断じたからこそ、〈能動〉と〈受動〉のみられる「視床脳」でない、〈大脳皮質〉たる部位が〈精神〉とされねばならなくなろう。他方〈思惟（精神）と行動（身体）との関係〉の両項を〈脳〉内での〈精神と身体との関係〉として受け取るならば、〈精神〉で〈思惟する〉〈能動〉が〈精神〉である〈脳（身体）〉で〈行動（運動）〉するだけの関係になり、〈精神〉が〈脳（身体）〉以外の、たとえば手と足のような身体には直接関係しないにちがいない。

ヴェーユが〈精神〉の〈思惟する〉を行使し続けたりできるはむろん、〈わたし（人体）〉が「動の行動」を取っていないときであり、〈思惟（精神）〉が当初から無用であることをいうのではない。工場体験以降、それ以前に劣らず、彼女が〈思惟する（静の行動）〉で精力的に健筆を振えたは身体を動かす〈行動（運動）〉中でない間隙を縫ってであり、たとえば〈過去のすべての世紀のすべての不幸〉⁴⁹を考察し得たのもそうなのである。ところが工場体験以降の諸論文（作品）に語られる、この有史以来の諸社会での〈不幸〉のことにあっても、工場体験以前のような〈不幸〉の告発だけとは異なる知見が加えられる。

彼女の生きていた諸社会に対する諸論文や、デカルトに代表された人間に対する学士論文での各告発はもとより、告発の土台となる、彼女の思想なしに不可能であった（告発は批評といい換えてよい）。だから実際の工場体験での〈行動（動の行動）〉によって、彼女がかかる思想をして確信を深めさせる何かを獲得し、その何かに支えられた〈思惟する（静の行動）〉や思想を工場体験以降の諸論文（作品）に表現させ得ていたと受け止められる。

「何か」には、筆者が前記引用文での語（句）〈sort〉や〈tristesse permanente〉へのそれぞれ〈天命〉や〈不変の悲しみ〉の訳から示唆されることを、また先きに「その本までを見極めようとした」と記したことをかかわらせ得る。すなわち「何か」は究極、上記した以外にいえる、もう一つの不幸（神に見放された不幸）⁹⁴をさすだけか、この「もう一つの不幸」に、ヴェーユの述懐する〈わたしの悲しみはわたしの惨めな、たえず繰返される過ち〉さえ含めた、彼女（人間）の生得的な〈不幸〉や、〈この時代のすべての不幸と過去のすべての世紀のすべての不幸〉が続べられていることをいい当てる。要はあらゆる〈不幸〉は〈神〉に、〈神〉の地上世界（自然）の創造に起因して生じるとされる。この創造は地上世界（自然）を〈神〉の住まう「あの世界（超越的な領域）」のようにではなく、たとえば〈不変な悲しみ〉に従わざるを得なくさせるようにある。これこそ彼女のいう〈自然の必然性〉であり、〈自然の必然性〉が人間を〈不変の悲しみ〉をはじめとした、あらゆる〈不幸〉から逃れなくさせている。

そこでヴェーユいわく、人間には〈行動（動の行動）〉すなわち〈感じる（ressentirやsentir）〉とその各〈感受性〉をもって、あらゆる〈不幸〉を引き受けることが課せられてくる。彼女はこれを自らに与えられた〈天命〉だといひ聞かせている。〈わたしの悲しみはわたしの惨めな、たえず繰返される過ちからくる〉という表現を〈天命〉の例にしているといふと、〈天命〉にはつねに屈辱的で不安な情態を〈感じる〉、彼女（わたし）のその〈悲しみ（感受性）〉がまとわりつくからして、〈わたし〉は〈不変な悲しみ（不幸）〉の一たる、そうした〈悲しみ〉すら背負い切らねばならぬのであり、それが〈天命〉のゆえんとされるし、彼女がこの〈天命〉に従うことは即〈自然の必然性〉を彼女に担わせる（受け入れさす）ことを含意させよう。そして筆者にすれば、〈わたしたち〉人間は〈天命〉が何も彼女一人に下されたとみるのでなしに、すべての人間に分け与えられていることを覚らねばならないといえるであろう。

そのために、〈わたしたち〉は〈思惟する（知性）〉よりか、〈感じる（感受性）〉能力に頼むほかなくなる。これによらずして、〈悲しみや歓喜は注意力の努力を払って生じる〉ことはない。〈悲しみや歓喜〉はヴェーユにあって、〈感覚〉をではなく、〈感受性〉を起因にし〈感受性〉に伴って生じる〈感情〉である。たとえば〈思惟する（知性）〉がすでに触れた通り、〈悲しみや歓喜〉と命名し得たり、この能力で〈歓喜〉を〈精神〉に近づけさせるのに、一方の〈悲しみ〉を〈精神〉から遠ざけたりできる役割を有するに比べ、〈思惟する（知性）〉で名付けられた各〈感情〉に実際気づかせ、その只中に囚われることを促す役割が〈注意力〉なのである。しかも〈注意力（の努力）〉は各〈感情〉に反射（反応）させる、〈魂（視床脳）〉での〈感受性〉なくば生み出されはしないから、各〈感情〉と同様、〈感受性〉に付随し含まれる能力とみておかねばなるまい。

この〈感受性〉はヴェーユにかの〈思惟と行動との関係〉すなわち〈精神と身体との関係〉として問われたなかで、〈行動（身体）〉の能力に配され、〈精神〉の〈思惟する〉を〈逃

亡〉や〈空無（真空）〉にさせる関係を有して語られた能力であった。ここから身体の〈感受性〉は〈思惟（精神）〉に関係すると捉えられども、直ぐに直接に〈思惟（精神）〉にかかわるのではなかった。何より後記する〈魂〉で、〈魂〉の〈感受性〉にならなければならぬからである（また繰返しになるが、〈思惟〉は〈精神（脳）〉以外の身体には直接関係しなかったし、〈思惟（精神）〉の方が先きんじて身体の〈感受性〉に、さらに〈魂〉の〈感受性〉に働きかける関係にはなかった）。身体の〈感受性〉は〈能動〉だけの作用をする〈精神（大脳皮質）〉と違い、身体で〈能動〉と〈受動〉を可能にする、同じ〈運動〉をもって、〈視床脳〉という〈魂〉に伝達させられることができた（この〈魂〉からみれば、身体の〈感受性〉は〈魂〉に受容（受動）され、そこで新たに〈能動〉の〈感じる sentir や ressentir〉が働きかけると、〈魂〉としての〈受動〉の〈感受性〉を生み出すわけである）。だから彼女にとって、〈魂〉の〈感受性〉と身体の〈感受性〉は関係せずにおかないから、この関係をばなかんずく〈魂と身体との関係〉で理解することが課せられてきた。

しかしその関係に語られる〈魂〉は再度確認するが、筆者のいう「視床脳」を示し、ヴェーユが〈魂の破壊〉と表現した際の〈魂〉ではない。〈魂の破壊〉が〈精神〉の〈思惟する〉能力の〈逃亡〉や〈空無（真空）〉に同意とされては、〈魂の破壊〉の〈魂〉は〈思惟する〉作用をなす〈精神（大脳皮質）〉（の部位）を織り込ませていう〈魂〉であった。換言すると「視床脳」（の部位）をたんにあらわす〈魂〉ではなく、〈脳〉全体をさす〈魂〉であった。後者の〈魂〉は〈わたし（人体）〉の謂にほかならないし、そこに身体から伝えられた〈感受性〉が受容されるとみることで、この〈魂（脳）〉以外の身体さえ〈わたし（人体）〉に含ませて捉えられねばならなかった。とはいえ、身体の〈感受性〉が実際受容される際の〈魂〉は〈脳〉の一部位たる「視床脳」であると指摘し得たほか、今度はその〈魂〉自身で、「動の行動」を、要は〈能動〉の〈感じる（sentir）〉を起動させては、〈魂〉の〈受動〉の〈感受性〉を生み出すと語っておく方が的確なのである。しかるに〈脳〉全体をさす〈魂〉がここに問われたは、〈魂（視床脳）〉の〈感受性〉がたとえばこの〈悲しみ〉によって〈量〉を増せば増すほど、〈脳〉内の〈精神（大脳皮質）〉の〈思惟する〉を〈逃亡〉させる例のような影響を与えずにいない、つまり〈思惟する〉機能を〈破壊〉つくすがゆえに、〈魂（脳）〉以外の身体はむろんのこと、〈魂（脳）〉全体すら〈感受性〉で覆われることになる断じられるからである。筆者はこの見方によらずに、〈魂と身体との関係〉や、こうした関係に立つ〈わたし（人体）〉を論じることができなくなる。だから〈わたし（人体）〉を質すは何より、〈魂（視床脳）〉の〈感受性〉の〈精神（大脳皮質）〉へのかかわりがあるといえても、〈精神〉には〈感じる〉働きがないことにあって、〈わたし（人体）〉を〈精神と身体との関係〉だけでみてはならないということにあるわけである。

「視床脳」の働きが〈能動〉と〈受動〉にあるからこそ、ヴェーユに〈魂〉と呼ばれる。そこで〈能動〉の機能だけにとどまる、〈脳〉の一部位を〈精神〉というのとは相違させる必要がある。この〈魂〉に身体の〈感受性〉が受容されるとき、身体の〈感受性〉が血管や神経の各なかに流れたり、伝達されたりするは求心的であるといえようし、また〈魂（視床脳）〉の〈感受性〉が不断〈脳〉以外の身体へ遠心的に流れ伝わるも求心的な場合と同様、自然なこと（必然性）でしかなかろう。その際、遠心的な〈感受性〉を受容した身体は身体で〈ressentir（ここは〈感じる（sentir）〉でなく、〈再び感じる〉の意）〉を発揮させては身体の〈感受性〉を、また求心的な〈感受性〉を受容した〈魂〉は〈ressentir（こ

こも〈感じる (sentir)〉ではなく、〈再び感じる〉の意〉を働かせては〈魂〉の〈感受性〉を生み出すことになる。

そこに立てば、筆者は〈精神 (思惟) と身体 (行動) との関係〉での両項には一方的で間接的な、〈思惟〉の〈行動〉への関係以外にない、換言すると両項の相互的な関係がないと、だがこの点を補うのが〈能動 (感じる)〉とその〈受動 (感受性)〉を相互に有する、〈魂と身体との関係〉であると断じる必要がある。二者の〈関係〉とした両項のうち、〈身体 (行動)〉の項が共通すれど、〈精神と身体との関係〉では身体 (行動) が活かされるとはみえない。これが可能になるは〈魂と身体との関係〉にあって、この〈関係〉にしかいわゆる《心身合一》はないといわねばならない。世間でいう、〈感覚〉や〈感情〉ましてや〈思惟 (知性)〉による〈心身合一〉はヴェーユに見当たらないと察知される。

ただヴェーユは〈心身合一〉の中味がこうだと解き明したり、明言したりしていない。だが前段に記したように、〈心身合一〉が〈感受性〉によって成り立つとみられるかぎり、まず指摘すべきは、この〈心身合一〉がこれまでのいかなる哲学者にも語られなかったことにある。彼女に窺えよう〈心身合一〉とは以下の通りであった。すなわち、誰もが身体を動かすこと (動の行動) は即身体の〈感じる〉〈能動〉を伴わせるのだから、身体 (身) は〈能動〉と〈同一のことがらである〉〈受動〉の〈感受性〉を生み出さざるを得ず、しかも〈魂 (視床脳)〉へ流れ伝わらせるとき、〈魂 (心)〉との求心的な〈関係 (合一)〉を保有するか、また〈魂 (心)〉も独自に、〈魂 (の〈感じる (sentir)〉とその〈感受性)〉)〉から身体 (の〈感じる (ressentir)〉とその〈感受性)〉へ流れ伝わる、身体 (身) との遠心的な〈関係 (合一)〉を保つかする。要するに〈魂〉と身体が各基点となり、それぞれ他方にも〈能動〉と〈受動〉の一連の能力をもたらし得て、相互的な関係を可能にするのが〈心身合一〉であって、この〈心身合一〉を充足させるは彼女の場合だけだということである。

それゆえヴェーユに〈心身合一〉の〈心〉が〈精神 (esprit)〉でなく、〈魂〉であると捉えられたはいつに求められるか。たとえば学士論文に記された語句〈非感受性的人体〉⁷⁷は彼女が〈思惟と行動との関係〉を強調するなかでの、「静の行動」たる〈思惟 (精神)〉を中心にした〈人体〉をさすほかないし、〈思惟 (精神)〉は直接〈行動 (身体)〉すなわちその〈感受性〉との〈関係〉に関与できない〈わたし (人体)〉にしかならなかった。だから〈思惟〉にとっては、〈行動〉を十全に補い得る〈関係〉が〈わたし (人体)〉に適合せねばなくなるといえるわけである。だがこの〈思惟 (精神) と行動 (身体) との関係〉の〈わたし (人体)〉は工場体験でいかにあったか。〈わたし〉の〈精神〉に〈思惟の逃亡〉や〈思惟の空無 (真空)〉を生じるのをみたからか、彼女はその〈破壊〉を語るに、しかし〈精神〉のでなしに、〈魂の破壊〉と表現させていた。この表現は前記した通り、工場体験をしておよそ〈行動 (身体) の感受性)〉でもって〈脳〉の一部位たる〈思惟 (精神)〉の〈思惟する〉機能を喪失せしめては、〈感受性〉がいわば〈精神〉に蔓延し、〈脳〉全体を覆う能力にさえなったことを彼女に確知させたがゆえに、〈感受性〉の出所である〈魂 (視床脳)〉の、この語が〈魂の破壊〉と表記されるとき、〈脳〉全体すなわち〈わたし (人体)〉をさす〈魂〉の語にも使用されねばならなかったことにある。〈わたし (人体)〉には本来二つの〈関係〉を並立させることが欠かせなくなろうが、それでも〈心身合一〉を成立させたくば、〈魂と身体との関係〉に立つしかないと見て取る必要がある (この〈関係〉

での〈魂〉は〈精神と身体との関係〉での〈精神〉との比較ではないから、〈脳〉全体を示す〈魂〉と受け取らねばならぬ。そして〈魂と身体との関係〉における〈わたし（人体）〉を証したは工場体験なのだ。とはいえこの工場体験あるいはそれ以降によって、彼女はかかる〈関係〉への思想的変容に迫られていたとみるか。否、この〈関係〉なる思想もすでに例の学士論文に語られていたのであり⁹⁸、そこから工場体験がその思想が正当かを試すうえでの実験と捉えられるは間違いないし、学生時代当時の思想的読みがこれほどまでに深められていたことに対して、驚きを禁じ得ないは筆者一人ではなからう。

すると〈わたし（人体）〉を形成するうえで、工場体験以前に強調していた〈思惟（精神）と行動との関係〉の〈精神〉で「静の行動」たる〈思惟する〉機能を活用させるは大事であるが、まさに工場体験から、この〈関係〉や〈思惟する〉ことよりか、身体を動かす「動の行動」のなかでの、〈魂と身体との関係〉の〈魂〉と身体の各〈感じる〉方がさらに肝要であると、要は各〈感じる〉とその〈感受性〉が〈わたし（人体）〉の形成にとってもっともふさわしい能力になるということである。〈感じる〉は〈能動〉〈行動〉〈運動〉と〈労働〉のいずれにも伴い、〈受動〉の〈感受性〉を産出させる能力であった。〈魂（視床脳）〉や身体の各〈能動〉と〈受動〉はそれぞれ心理学や生理学でいう刺激と反射（反応）に換言できる。これに倣うと反射〈反応〉は〈感受性〉であり、〈感受性〉はヴェーユにとって〈心象〉でもあるといい得る。したがってこの〈心象〉は彼女がマルクスにみた、〈感覚〉や〈思惟〉による〈心象〉⁹⁹でも、デカルトに語られよう、「日常的用法」での〈感覚〉や〈思惟〉による〈表象（figure）〉¹⁰⁰でもない。彼女にいう、〈感受性〉なる〈心象〉は〈悲しみ〉か〈歓喜〉となって〈魂（視床脳）〉に表出される。ここで〈感受性〉〈悲しみ〉と〈歓喜〉の語は彼女（や筆者）の〈思惟（知性）〉の働きで各名付けられると繰返すにしても、筆者は彼女の生理学的でない、哲学者的立場からは、この〈感受性〉なる〈心象〉をして〈魂（視床脳）〉に〈悲しみ〉的、〈歓喜〉的各〈量〉を描かせるとしかいいあらわせない、極論してみるに、〈感受性〉の〈悲しみ〉か〈歓喜〉かは〈脳〉を含めた全身体に覚え（感じ）られ、その〈脳〉全体をさす、〈人体〉たる〈わたし（魂）〉に教えてくれるのであり、かつこの〈わたし（魂）〉はいずれにも従わねばならないということになる。

また〈悲しみ〉と〈歓喜〉の各〈心象〉を対照させると、それらは〈わたし（魂）〉にとって〈矛盾〉した〈心象〉となる。これもヴェーユのいう、世界（自然）の〈必然性〉ゆえに、世界（自然）の何もかもに現出せずにはいない〈矛盾〉の一である。〈わたし（魂）〉が〈悲しみ〉や〈歓喜〉という〈矛盾〉に従わねばならぬことは〈矛盾〉を、要はこのどちらをも受け入れること以外にない。これらをそれぞれ〈不幸〉や幸福に対応させ得るにせよ、〈わたし（魂）〉はあのヨブが幸福から見放され〈不幸〉にとどまるよりも、幸福で居続ける方を願うにちがいない。だが〈わたし（魂）〉が終始幸福を願うだけだと、世界の人たち〈労働者〉の〈不幸〉は、〈人体〉でもある身体を動かすことはどうあろうとかわなくなる。さすれば彼女の語るように、〈わたし（魂）〉はなかでも労働者の〈不幸〉を自ら〈運動（労働）〉しては引き受け、その〈悲しみ（苦しみ）〉たる〈感受性〉によっては「さらなる〈魂の破壊〉」を惹起する自己放棄に導かれ、彼女に〈地上の必然性は神の沈黙の響きである〉といわせた、〈神〉の住まいする〈超越的な領域〉へ参入できる、換言すると〈わたし（魂）〉は〈神の沈黙の響き〉たる、あらゆる〈矛盾〉を、わけてもあらゆる〈不幸〉を受け入れずに、幸福すなわち〈善（神）〉に達することができない。人

問自らが地上でこの〈神の沈黙の響き〉に答えることをしてはじめて、〈わたし（魂）〉を〈不幸〉に取り囲まれた〈矛盾〉から解放させるということを、彼女は自身に下された〈天命〉を身をもって体现し、〈わたしたち〉に語りかけてくれたといえるのである。

筆者にはヴェーユのいう〈超越的な領域〉に関する、さらなる言及を試みるはともかくも、上記してきたことが彼女の哲学とみられるならば、彼女の哲学が、そのねらいが奈辺にあるかを筆者なりに捉えることで、〈わたしたち〉が今日までに構築したとされる哲学に対し、何らかの批評を加え得ることが許されよう。哲学とはデカルトの語る〈真理の探求〉にたとえていうと、彼が〈cogito〉（認識論）をもとに、〈sum〉（存在論）を確信し、どう存在するかに見合う道徳（倫理）を説く実践論（価値論）に亘らせることではこれらの思想の体系化を旨とせざるを得ない学問であると筆者に理解される²⁰。筆者はこの根拠を、〈cogito ergo sum〉の〈ergo（それゆえに）〉に、かつ道徳に関しては彼の、エリザベト王女への諸手紙や『情念論』での主張に見出し得るからである。およそ認識論が基軸となり、存在論や実践論に展開し組み立てられる、これらの思想の全体をもって哲学と呼ぶことに従いみれば、筆者は彼女に認識論、存在論と実践論を探り出せるからして、その全体を組織させていう哲学が成るであろうといえる。だがそこで質しおかねばならぬは、彼女が一生をこの哲学の構築だけに捧げることを、また自ら哲学者たらしめんとすることを望んでいなかったと触れたにせよ、一方で一に、彼女の哲学が彼をして〈真理の探求〉を導出せしめた、例の方法に準じるとみなせるか否かにある。否、筆者は彼女の哲学は認識論すなわち存在論すなわち実践論であると結語する。

この結語はこれまで語ったことから導かれよう、当然の帰結であるが、しからば何ゆえかかる結語に達し得たかを、その都度問うた語（句）を用いてまとめおかねばなるまい。ヴェーユの哲学は〈魂と身体との関係〉に基づき、この〈魂と身体〉を行き来する〈感受性〉を中心に成り立つ認識論から出発していた。たとえば心臓が鼓動し続ける、この不断の生の証である〈運動〉以外での、身体と魂の各〈運動〉、〈行動（動の行動）〉、〈労働〉や〈能動〉すなわち〈感じる〉は、身体と魂に各〈受動〉たる、〈身体構造〉に起因した〈妨害（不幸）〉すなわち〈感受性〉を生じさせた。その〈感じる〉をもって存在するとみなせば、彼女（人間）の存在は身体と魂とを各動かしもたらされる〈感受性〉を排除するのではなしに、受け入れることによった。そうした存在をして彼女（人間）をば価値の一たる〈超越的な領域（善）〉へと参入せしめる生き方にも結びつけることができた。これを前記の、「〈わたし（人体）〉なる〈脳〉全体をさす〈魂〉が〈感じる〉とその〈感受性〉にそのまま従うほかない」や「人間がこの世界に確実に存在するとみるはいかなることで（可能）か」という例で繰返すと、ここに語られる、彼女の哲学は、彼女（人間）がかかる生得的で〈必然性〉的能力を背負って存在することに、それなくば何らかの価値を見出せないことに基づくとみえるからして、〈感じる〉「動の行動」によって生じる〈感受性〉を中核とした認識論だけで存在論や実践論（価値論）にさえ充当し成立せしめられているというわけである。デカルトに倣うのではないが、彼女の場合、人間は〈感じる〉間、存在するのであって、もはやかの〈思惟する〉のみを最優先にさせてならないことになる。

その〈思惟する〉については以下の通りであった。〈脳〉全体を示す〈魂〉には工場体験以前のヴェーユに主張された、〈精神（思惟）と身体（行動）との関係〉（およそ例の学士論文すらかかる〈関係〉を『デカルトにおける科学と知覚』として解こうとしたのでは

ないか)からの、〈精神〉と名付けられた部位が含まれていた。〈精神〉という〈脳〉の一部(大脳皮質)では、〈知性(理性)〉による〈理解する〉や〈意志する〉などの〈思惟する〉がこの「静の行動(能動)」だけでもって機能していた。こうした〈思惟する〉〈知性(理性)〉は学士論文や諸論稿をものし、またこれらの作品中にかいまみせては、上記したごとくに成り立つ、彼女の哲学をものする際に、もとより駆使される役割を担っていた(ただこれも一見したように、彼女は哲学にまとめ上げる時間を持ち得なかった)。してみると一に、これらのためにもやはり、彼女(人間)にとって〈感受性〉よりか〈知性(理性)〉を有用な能力に認めおかねばならぬかである。この世界(自然)の事象のあらゆる〈矛盾〉を科学的に認識せんとするかぎり、これをも机上で哲学(思想)的に組み立てんとするかぎり、しかりである。しかしなかんずくこうした哲学(思想)は彼女(人間)の体(経)験(身体と魂の不断以外の各〈運動(感じる)〉とその〈感受性〉)によった生き方を通してのみ可能であった。哲学とは彼女にこの生き方自体になるといわせるのであり、いわば純粋な〈知性(理性)〉が生き方より先きに行使されて成る哲学ではない。要は彼女の哲学は体験をして体験(哲学)を〈知性(理性)〉に書き留めさせたことになる。とどのつまり、彼女にあって、生きることは机上での「静の行動」にとどまる〈cogito〉を前面に打ち出す哲学であり得ない、別言すると〈感受性〉のもとの認識論を中心にして、これが存在論や実践論にもなり得るとみる、彼女の生き様そのものの哲学は〈思惟する(静の行動)〉だけで成り立つのではないということである。

したがって一に、ヴェーユに語られる認識論は實在論(唯物論)的か觀念論的かが問われくる。筆者はそのいずれにも該当しないと即答し、なぜかを再度確認しておく。前者において、例の、「日常的用法」にかかわらせ得るデカルトやマルクスがともに〈感じる(感覚する)〉とその〈感覚〉をもって、それぞれ實在論的、唯物論的立場に、または「世界の人間への関係」に立たんとした。これは世界(自然)を受容すべく、これらの能力が彼らに発揮されたという謂でしかなくなるが、それでも彼らの魂や意識は、この〈感じる(感覚する)〉(能動)が働きかけるとて、世界(自然)の諸事物そのものを直接ではなく、〈感覚〉(受動)たる〈表象〉や〈心象〉として受容させるにすぎない。だが彼女は「世界の人間への関係」に立つとはいえ、彼ら各自のいう〈魂〉や意識での、世界の〈表象〉や〈心象〉として世界(外部)の諸事物を映し取らせる、この〈感覚〉をば〈信用しない〉がゆえに、筆者は彼女を實在論(唯物論)者と呼ぶことが不可能なのだ。これに与しないはだから、彼女にも適当する表現の〈魂〉の〈心象〉が世界(外部)からの〈刺激〉に対する、〈魂〉を含めた各身体(器官)内部での〈運動〉の関与により生じくる点で〈感覚〉の場合と同様にみえども、しかしその〈運動〉をして、〈質的〉〈変化〉をもたらし〈感覚〉能力と違い、〈量的〉を知らしめ²⁴、しかもかかる〈身体(諸器官の)構造に妨害される〉能力を、要は人間にとって生得的な、いわば〈不幸〉たる〈反射(反応)〉能力すなわち〈感受性〉を生み出させては、〈感受性〉が〈魂(視床脳)〉に受け入れられることをさすと断じおく必要がある。それゆえこの〈感受性〉に基づく認識論は周知の實在論的、唯物論的認識論ではないということである。

後者(觀念論的)において、たとえば〈真理の探求〉を提唱したデカルトが〈知性(理性)〉による〈思惟(する)〉をもって、觀念論的立場に、または「人間の世界への関係」に立たんとした。これは人間(の〈知性(理性)〉)が真先きに世界に働きかけ、世界をこ

うだと解釈し、掌握できるとすることにある。だがヴェーユにあって、この〈観念（思惟）〉中心の認識論にもなり得ないのは、例の〈真理の探求〉で語られた〈精神〉が取り上げられ、そこに〈知性（理性）〉によるだけの〈思惟する〉が託されたにしても、彼が〈脳〉の外に〈精神〉を配したのとは異なり、彼女のいう〈精神〉をば、〈魂（視床脳）〉と同じく、〈栄養を取り、成長し〉²³得る〈脳（大脳皮質）〉すなわち〈身体〉とみては、〈脳〉全体をさしている〈魂（わたし）〉に含ませうえて成る認識論でしかないと断じおかねばならぬからである。要は〈身体〉を、その能力を基調とし、およそ〈知性（理性）〉のみに依存し切るのではない、彼女の認識論は、到底観念論的認識論ではあり得なくなる。

ヴェーユにいう認識論が、ここは彼女がこれを「静の行動」でものしたことにしてみても、實在論（唯物論）的でも観念論的でもないとされるならば、いかに表現され得るかであろう。筆者にはそれに答えるべき、他の修飾語句がみつからない。しかし少なからず、「動の行動」として存在論や実践論すら織り込ませてあると捉えられた、彼女の認識論すなわち哲学にあって、今だに語られる、「静の行動」での實在論（唯物論）や観念論はもはや不必要であるばかりか、彼女の認識論はマルクスやデカルトをしてついにはこれらの総合をめざさざるを得なくさせた各認識論のようにあるのではないといわなければならないだけである。彼らは筆者のみるところ、世界（自然）の諸事物を〈感覚〉に従わせども、マルクスのいう意識たる〈脳〉に、デカルトにいわせる「日常的用法」での〈魂〉たる〈脳〉に前記したごとく、直接もたらしはしないと知るに及んで、世界（自然）の諸事物を「静の行動（思惟）」の代用でもって〈観念（思想）〉にするほかなくなった。こうした認識論はそれゆえ、マルクスでは、意識における、彼女の指摘した〈心象〉が〈感覚〉（唯物論）とヘーゲル譲りの〈思惟（理性）〉（観念論）との総合²⁴で組み立てられて成ることを、デカルトでは、自ら記す〈表象〉が、まず上記した「日常的用法」の〈魂〉において、〈感覚〉（實在論）を中心にあらわされて生じることを、さらに〈真理の探求〉の〈脳〉の外にある〈精神〉において（したがって〈表象〉から〈感覚〉（身体）が排除され、〈表象〉は〈観念〉に取って代わられる）、〈思惟（する）〉のみの活用で生じることを示唆させる。そして彼は個別の用法での各〈表象〉を打ち出すほか、おそらく實在論でいう〈魂〉と観念論でいう〈精神〉とを兼ね備えた〈精神〉の名のもとに、彼女に〈もう一人別の（生き返った）デカルト〉²⁵と語らせ、これをもって筆者に「もう一つの真理の探求」と名付けさせるところの、實在論（アリストテレス）的、観念論（プラトン）的各用法を総合して²⁶乗り越えんとする用法（認識論）で生じよう〈表象〉を用意していたのである。

彼らの試みた総合はしかし、ヴェーユの〈人間のいかなる思想も矛盾を免れることができない〉²⁷との言を待つまでもなく、〈矛盾〉であり、マルクスですでにみた通りである²⁸。〈いかなる思想も〉とはたとえば、前段にいう實在論、観念論やこれらを総合した思想であろうし、彼女に〈感覚は質料、空間、時間も含まず〉²⁹と、〈知性はいかなるときも興義に入り込めない〉と語らせる各思想をさすであろう。以上はもとより各名称、各概念や各役割を見出せ得る〈知性（理性）〉が作用し成る。だが彼女にすれば、こうした諸思想が導かれる、〈知性（理性）〉による〈思惟する〉「静の行動」の働きは、たえず〈脳（精神）〉たる〈身体構造に妨害される〉とみえたのだから、〈知性（理性）〉はこれを行使せんとする人間にとっては〈感受性〉と同様、すでに〈矛盾〉に与する、余計な〈妨害〉（要は生得的な〈必然性〉なる〈不幸〉）から抜け出せなくなるほか、〈脳（精神）〉にのみ作

用する〈思惟する〉にとどまらせるだけに、彼女には信を寄せ得ない能力に捉えられる以外になかった。なぜか。再度いうが、彼女を除く人間（哲学者）たちは、この〈知性（理性）〉による〈思惟する〉を人間たるにふさわしく信仰するには、これを他のすべてより優位に立たせねばならぬとする姿勢から、人間に不都合な、〈矛盾〉の一たる〈妨害（不幸）〉を惹起させる、世界（自然）の〈必然性〉（実在）を軽視（無視）するか、忘却しては、世界（自然）や人間自らに対し都合のよい解釈（観念）を優先させたからである。

しかし〈感受性〉はこれも一見したように、人間が人間たる生物として作り出す〈思惟〉とは違うし、また〈思惟する〉〈精神（脳）〉で作用するのとも異なろう、身体や〈魂（脳）〉で各〈感じる〉際に〈妨害〉によって生じる〈妨害（不幸）〉そのものの各能力であった。この〈感受性〉には筆者が主に語ってきた〈苦しみ〉（〈妨害〉もこれに加えられる）以外に、〈歓喜〉⁸³をもたらし場合もあるとされる。〈苦しみ〉と〈歓喜〉ですら〈矛盾〉をかたちづくらずにいない。これだけを見ても、世界（自然）は〈矛盾〉によって実在することになる。それは世界（自然）がすべからず〈必然性〉に覆われることに起因する。〈矛盾〉の一たる〈苦しみ（不幸）〉が世界（自然）にあるのだから、これまでに語った通り、人間が〈世界（自然）の美〉に触れて〈歓喜〉に満たされると等しいほどに、その〈感受性〉により〈苦しみ（不幸）〉もまた受け入れられるしかもはやないわけである。この受容を人間に可能にさせるとみえるは、ヴェーユが〈認識一般において、外観は感受性によってもたらされるし、推論によって外観の背後にあるものが見出されねばならない〉⁸⁴と記すのを参照していうに、〈感受性〉が〈感じる〉にあって、〈外観〉を受け取るだけでなく、〈外観の背後にあるもの〉さえ何も〈推論（思惟する）〉に頼らずとも、〈理解できる（saisir）〉⁸⁵ことを筆者に確認させ得るから、〈全知全能〉⁸⁶を、さらに〈活動〉の真意を語る能力に位置づけられることにある。〈外観の背後にあるもの〉はなるほど〈推論〉の助けを借りても探されようが、その際でも〈感受性〉に基づいた〈推論〉でなくてはならぬであろう。

とまれ人間が世界（自然）の〈必然性〉に起因する〈不幸〉を〈感受性〉で受け入れることをせずに、〈矛盾〉にかかわれない。とどのつまり〈矛盾〉を解消するこの試みなくば、人間が世界（自然）に存在すべく、〈不幸〉に耐え、これを乗り越えて〈歓喜〉に達すること、同時に〈超越的な領域〉へ参入することは不可能になる（ただ〈矛盾〉の解消のためといっても、すでに〈歓喜〉に触れていさえすれば、〈歓喜〉にあえて〈苦しみ（不幸）〉を引き受けさす必要はなかろう。これも世界（自然）が〈必然性〉、〈矛盾〉である証しでしかない）。そこで〈感受性〉がとなると、それは「静の行動」で書かれる、机上の認識論の主たる能力としてあっただけでなく、かく記させたは身体を動かす「動の行動」を現実にしてのことによるのであり、身体の〈運動〉で発揮された〈感受性〉は上記したごとき存在論や実践論を兼有させる、いわば生きたといえる認識論をかたちづくる、その中心的能力に配置されたのだ。世界（自然）が〈必然性〉により創られては、人間はそこから生じくる〈矛盾〉を抱え込まざるを得ないばかりか、〈矛盾〉を解消するに、人間がその度に形成する社会では、たとえば生存競争を煽られ、そこに潜む〈不幸〉に遭遇してはなおさらのこと、こうした〈不幸〉をも減らさずにおれないし、社会の一員である個人では、社会に惹起する〈不幸〉を引き受けなくてはならなくなる。これもまた人間にとって〈不幸〉と無関係ではない〈矛盾〉の証しになるが、およそ〈不幸〉が世界（自然）にみられる以上、人間は〈不幸（矛盾）〉が神の世界（自然）に対する愛であることを、神に

よる真理であることを覚知しつつ、〈不幸〉を背負うことなしに、こうした宿命から救われないことを忘れてはならないのである。

ヴェーユの哲学が〈感受性〉を中核にした認識論によって立ち、存在論をして形而上学にまで及ばせるのは、〈わたしたち〉人間が自らの存在論や実践論を含む「動の行動」(運動)でもたらされるこの〈感受性〉に彼女の人生のように賭けることではじめて、彼女は世界(自然)が神に〈痛ましく愛されている〉〈必然性〉(〈痛ましく〉かはともかくも、真宗でいう法(阿弥陀仏)を愛する(南無)見方に通ずるやも知れぬ)に従われることを明かし得たと捉えられるからである。筆者は彼女の哲学として以上のことをみたにせよ、〈わたしたち〉に伝えんとした哲学を自虐に満ちた思想と捉えることはしない。それこそ世界(自然)を人間側に引き寄せたうえで、勝手に解釈せんとする、人間の傲慢によって生じる捉え方になるのだから。それよりか筆者が彼女の哲学で強調したいことは、これが筆者なりの「静の行動」でわずかにまとめられたにすぎずとも、プラトン(デカルト、カント)、アリストテレス(トマス、ヘーゲル)、マルクスやサルトルなどが各「静の行動(思惟)」により教示されてきた哲学(思想)とは相違せずにおれないし、しかも彼らの、時代を繋いだ哲学(思想)の縛り(呪縛)から解き放す哲学だということにある。〈わたしたち〉は哲学そのものたる、彼女の生すなわち「動の行動」を追体験できないとはいえ、この彼女の独自のといえる哲学をして何かを、たとえば頭脳の人工代替物なるコンピュータでの、今日の科学(学問)ではもたらされはしない、かの真理を脳を含めた身体に覚えさせねばならぬのである。

シモーヌ・ヴェーユの哲学

〔完〕

註

- (1) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅱ〕」(新潟大学大学院「欧米の言語・社会・文化」研究, 第14号, 2008年) P.12参照
- (2) Simone WEIL 《Sur la science》(Gallimard) 中の《Science et perception dans DESCARTES》に〈nécessité〉はP.53, P.56, P.68, P.97に散見される。
- (3) Ibid., P.46
- (4) 拙論「なぜ感受性なのか(2)」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第93輯, 1997年) P.38 (そこに視覚に関する、デカルトからの引用文が⑩として掲載される) 参照
- (5) 拙論「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第112輯, 2003年) PP.27-29, P.41 (そこはさらに〈もう一人別のデカルト〉や〈生き返ったデカルト〉という表現がみられる) 参照
- (6) Ibid., P.48 (また〔補Ⅲ②〕新潟大学言語文化研究, 第9号, 2003年, P.110, PP.114-116 (とくにP.116)) 参照
- (7) Simone WEIL 《Sur la science》(Gallimard) 中の《Science et perception dans DESCARTES》P.84参照
- (8) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》(ART21) (Gallimard) P.706
- (9) Ibid., P.706

- (10) Simone WEIL 《Sur la science》(Gallimard) 中 の《Science et perception dans DESCARTES》P.71参照
- (11) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P.4註(8)参照
- (12) 拙論「ヴェーユ身体論」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第120輯, 2007年) P.43註(21)参照
- (13) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P.11註(25) (この作品は1942年のものとされる) 参照
- (14) Simone WEIL 《Attente de Dieu》(Fayard) 中 の《LETTRE IV Autobiographie spirituelle》P.54
- (15) 拙著『シモーヌ・ヴェーユ研究』(白馬書房, 1985年) P.P.157-202, 第二章第三節「歴史における不幸」(はその一例) 参照
- (16) Ibid., P.P.86-156, 第二章第二節「もうひとつの不幸」(はその一例) 参照
- (17) 拙論「ヴェーユ身体論」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第120輯, 2007年) P.45註(23)参照
- (18) Simone WEIL 《Sur la science》(Gallimard) 中 の《Science et perception dans DESCARTES》(のconclusion) P.97に〈l'union de l'âme avec le corps〉の語句がみられるほか, 〈âme (魂)〉の語はP.21, P.72, P.74に見出せる。〈esprit (精神)〉の語に比べ, 圧倒的に使用数が少ない。それだけに〈魂〉の語がいかに用いられるかを分析するのは研究の一であろう。ヴェーユ自身これを工場体験で試そうとしていたと理解される。
- (19) 拙論「ヴェーユとマルクス①」(新潟大学言語文化研究, 第11号, 2006年) P.81註(41)参照
- (20) 拙論「デカルトにおける理性と感覚(4)」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第101輯, 1999年) P.68註(17)参照
- (21) René DESCARTES 《LES PRINCIPES DE LA PHILOSOPHIE》(Gallimard) P.566 (ここで彼は〈哲学全体〉を〈一本の木〉にたとえ解説する。人間にとって, 〈哲学 (木)〉自体は認識論に, 〈根〉は〈形而上学〉と, 〈幹〉は〈自然学〉と (いう存在論) に, 〈枝〉は〈医学, 力 (技術) 学と道德〉と (いう実践論) にみなされくと読む) 参照
- (22) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P.4註(8)参照
- (23) 拙論「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第108輯, 2002年) P.2註(8)参照
- (24) 拙論「ヴェーユとマルクス①」(新潟大学言語文化研究, 第11号, 2006年) P.78註(15), P.81註(38), 註(39), 註(40)参照
- (25) 拙論「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第112輯, 2003年) P.28⑦, また本稿註(5)参照
- (26) Ibid., P.P.46-52参照
- (27) 拙論「ヴェーユとマルクス②」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第119輯, 2006年) P.75註(4)参照
- (28) 拙論「ヴェーユとマルクス①」(新潟大学言語文化研究, 第11号, 2006年) P.P.80-81 註(41)参照

- (29) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P4註(9)参照
- (30) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅰ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第121輯, 2007年) P49註(17)参照
- (31) 拙論「シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅰ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第104輯, 2000年) P1註(1)参照
- (32) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P5註(12)参照
- (33) 拙論「シモーヌ・ヴェーユの哲学〔Ⅱ〕」(新潟大学大学院「欧米の言語・社会・文化」研究, 第14号, 2008年) P14註(23)P18註(34)参照
- (34) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P1註(1)参照